

ながの学ことはじめ—北信五岳考

石澤 孝

I はじめに

地域には、それぞれの特性に応じた独自の文化が生み出され、育まれてきている。ところで、都市という用語は「都」と「市」に分解されるが、「都」は政を行うところ、「市」は商取引を行うところという意味を持つ。したがって都市は、地域における政治・経済の中心機能を有する場ということになる（石澤、1998）が、都市の有する機能はそのことに限られない。地域文化が生み出され、育まれる場、ある時には他地域への文化の発信の場としての機能、すなわち地域文化の中心としての機能も備えているのである。

さて、現代社会に生きるわれわれは、地域の文化は、その地域における中心都市において形成されてきたものと考えがちである。しかしながら、地域における都市体系は、近世以降に限定しても、明治期初期における県庁所在地の選定期と戦後における経済の高度成長期という、少なくとも二度の大きな変容期を経てきている。前者の例としては、それまで津軽藩の一外港にすぎなかったが、県庁が置かれた結果、県内第一の都市に成長した青森があげられる。新発田藩や長岡藩の外港であった新潟も同様である。後者の例としては、内陸型の製造業が集積して県内第一の都市に成長した福島県の郡山や、石油コンビナートが立地した三重県の四日市があげられる。

このように、現在ある地域文化のすべてが必ずしも、われわれが認識している都市体系の中で形成されてきたものとは限らない。とすれば、地域文化の成り立ちを探ることによって、その文化が生まれた当時の都市体系を復元することが可能となるのではなからうか。つまり、文化の発信地を探ることによって、かつてあったであろう地域の中心都市をみいだせることになるのではなからうか。以上のことをふまえ、ここでは長野県北部地方の「北信五岳」という文化景観をとりあげ、その発信地について検討を加えてみたい。

II 北信五岳

長野から上信越自動車道を北上してみよう。豊田飯山インターチェンジをすぎるとトンネルが連続する。最後の薬師岳トンネルを抜けると目前に雄大な光景が広がる。いかにも山岳地域とイメージされる信州を代表するかのような風景である。正面に妙高山（2,446 m）が立ちふさがり（写真1）、その左に黒姫山（2,053 m）と飯縄山（1,917 m）がそびえ立つ。また、黒姫山と飯縄山との間から戸隠山（1,904 m）が望まれる（第1表）。



写真1 上信越自動車道から望む妙高山



第1図 北信五岳

20万分の1地勢図「長野」、「高田」に加筆修正

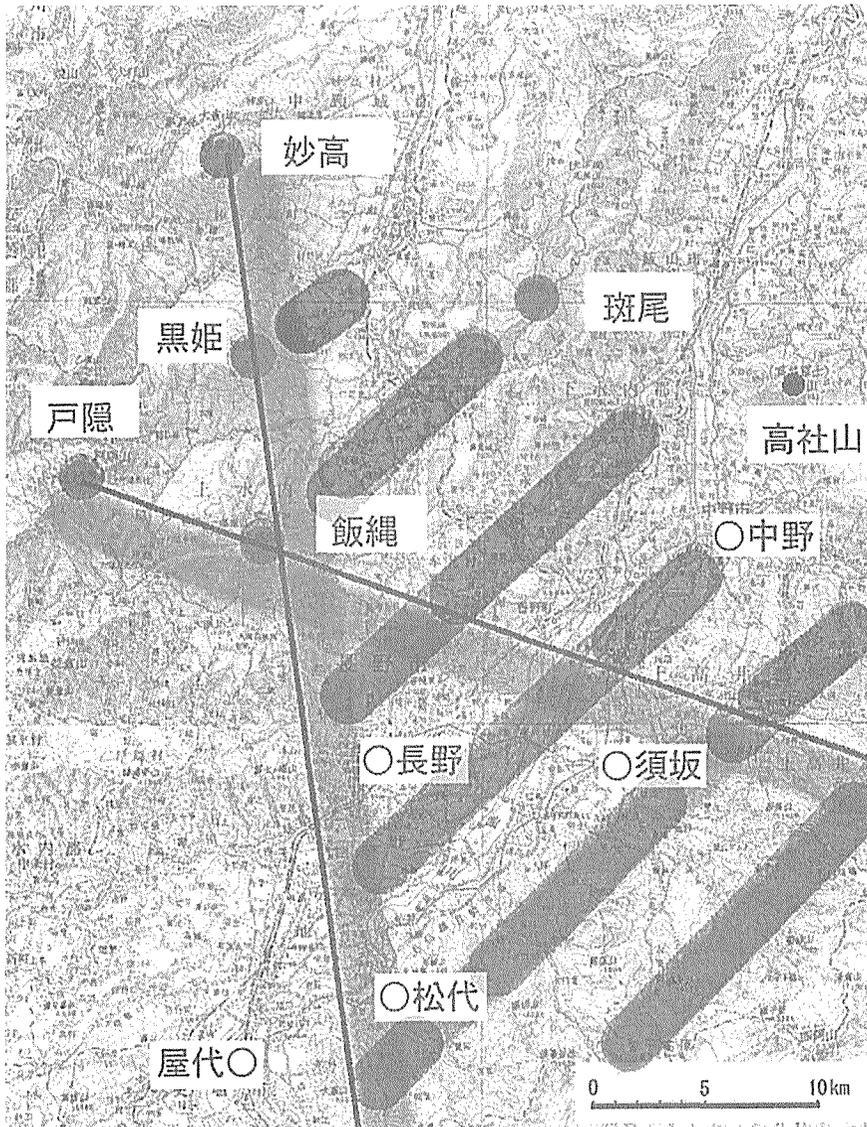
第1表 長野県北部周辺地域における主要な山々

名称	位置	標高
妙高山	新潟県	2,446 m
四阿山	長野県	2,333
黒姫山	長野県	2,053
志賀山	長野県	2,036
飯縄山	長野県	1,917
戸隠山	長野県	1,904
斑尾山	長野県	1,382
高社山	長野県	1,352

これらに斑尾山（1,382 m）をあわせたものが北信五岳¹⁾と称される山々である（第1図）。屏風のようにそびえ立つ戸隠山以外は独立峰であり、長野県北部、特に長野盆地北西部のランドマークとなっている。長野盆地を取り囲む山々には、標高がより高い志賀山（2,036 m）や四阿山（2,333 m）などがあるが、これらは長野盆地東部の連山の一部をなしており、他の山々から区別されてそびえ立つランドマークとはいえない。唯一、志賀連山の西に連なる高社山（1,352 m）が独立峰となっているが、標高が低いことから北信六岳ならいざしらず北信五岳の中に入らないのも納得がいく、と書きたいところだが、問題は「北信」という用語である。

長野県は大きく4つの地域に分けられることが多い。その一つが北信地方であり、「北信」は長野盆地を中心とする地域をさす用語である。一方、妙高山と黒姫山の間を流れる関川によって境される妙高地域（妙高原）は、新潟県に属している。東京に住む人々のなかには妙高原を長野県と思いこんでいる人が多い。これは、かつての信越本線の在来線特急「あさま」が直通していたこと、北信越のスキー場として志賀高原と並んで妙高原の知名度が高く、信越線のスキー列車シュプール号が妙高原駅を終着駅としていたこと、路線バスが長野市に本社のある川中島バスの営業区域であったことなどが関係しているのだろう。いずれにしても、新潟県にある妙高山が北信、すなわち長野県の山として数えられているのである。不思議なことである。前述したように、県内には、志賀連山に連なるとはいえ独立峰としての高社山があるのだから、妙高山の代わりに高社山を加えた北信五岳であってもいいはずである。

では、なぜ北信五岳に県外の妙高山が加わり、県内の高社山が省かれているのであろうか。その由縁を考えるためには、これらの山々を望める場所を特定してみる必要があるであろう。換言すれば、その場所を特定することにより、北信五岳という文化景観の発信地にたどりつくことができるのではないだろうか。



第2図 北信五岳と主要都市の配置
20万分の1地勢図「長野」,「高田」に加筆修正

III 文化景観の発信地を考える

北信五岳を一望に望める場所の特定を試みてみよう。飯縄山と戸隠山、妙高山との山頂を結んだものが第2図である。平地から山を望むにはその仰ぎ見る角度、仰角を考えなければならない。たとえ低い山でもその仰角の中にはいると視界が遮られ、その後ろにそびえる山体が見えなくなってしまうからである。したがって、少なくともこの線上の付近は、飯縄山のためにその奥に位置する戸隠山や妙高山を望むことができない地域と考えることができる。実際に、屋代からでは飯縄山、戸隠山とその間の越水ヶ原が大きく立ちふさがって妙高山や黒姫山を望むことができない。一方、中野からは、飯縄山と黒姫山の間を流れる鳥居川の谷を通して戸隠山を望むことができる。したがって、大きく北信五岳を望むことが可能なのは、図で斜線が引かれた地域に限られることになる。

さて、長野盆地西縁に位置する長野市街地（以下、長野と称する）から北信五岳を望もうとすると旭山（785 m）、大峰山（828 m）や三登山（923 m）、さらには飯縄山に視界を遮られ、飯縄山以外を望むことはむずかしい。したがって、北信五岳の発信地から長野は除かれることになる。同様に、長野盆地西縁の地域では里山に視界を遮られるから、北信五岳の発信地は盆地の西縁以外の地域に位置することになる。

一方、長野盆地東縁に位置する中野や須坂からは、西から北西にかけて大きく北信五岳を望むことができる。どうやら、この高井地方²⁾が北信五岳の発信地の一つと考えてもよさそうである。中野には、明治初期に、東北信地方の旧天領を管轄する中野県庁が置かれていた。松代藩に互する石高を有していたこともあるから、北信五岳という文化景観の発信地であったとしても不思議ではない。

とはいえ、中野や須坂の北方には大きく高社山がそびえている。したがって、高井地方のみが発信地だとすると、北信五岳のなかに高社山が含まれないのは実に不思議なことになる。登山が始まる以前の近世には、山々は山岳信仰という形で庶民に親しまれていたという。これらの山々のうち、妙高山、黒姫山、戸隠山、飯縄山そして高社山が山岳信仰の対象となっていた。だから、山岳信仰を通じた親近感という点においても、斑尾山ではなく高社山が北信五岳に数えられてもいいはずなのである。

それでは、他に北信五岳を望むことのできる場所はどこであろうか。残るは、長野盆地南部の松代となる。実際、松代からは、西から戸隠山、飯縄山そしてその隣にかろうじて黒姫山と妙高山が望め、やや離れて斑尾山を望むことができる。松代の北東、大室や小島田の千曲川の堤防からは黒姫山や妙高山の峰々も、よりはっきりと望むことができる（写真2）。しかも、中野から北信五岳を望むには大きく顔を左右に動かす必要があるが、松代からは顔を動かさなくても一望できるのである。

さて、須坂や中野から望むことのできた高社山はどうだろうか。松代から北にのびるかつての北国街道は国道403号線に沿ってではなく、尼巖山（780 m）と金井山との間の鳥打峠を越えて大室に抜けていた³⁾。この尼巖山から金井山に連なる里山が視界を遮

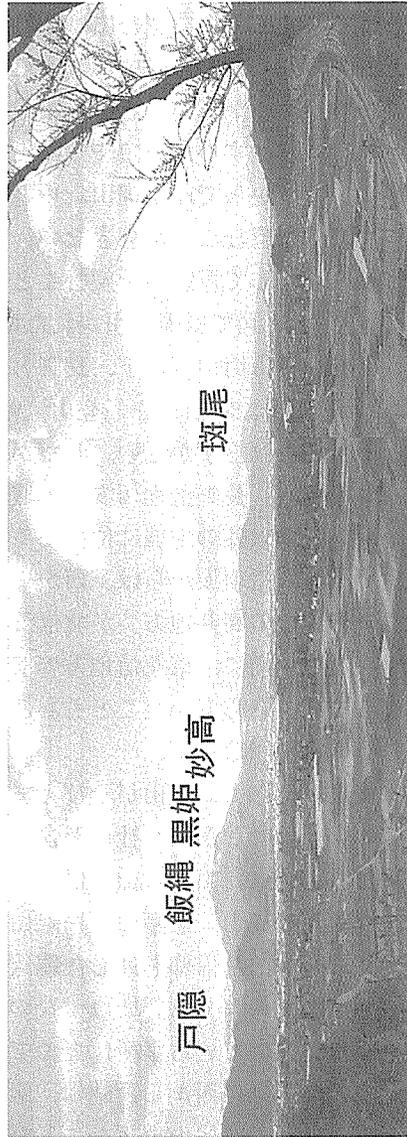


写真2 鳥打峠から望む北信五岳

第2表 北信地方における主要都市とその人口（人）

都市	市町村	1995年	1920年	1870年代
長野市街地	長野市	177,433	37,308	8,073
篠ノ井市街地	長野市	24,020	3,409	1,510
松代市街地	長野市	9,744	8,178	8,415
須坂市街地	須坂市	22,091	17,554	2,547
中野市街地	中野市	12,949	7,856	2,818
飯山市街地	飯山市	5,765	7,273	5,876
稲荷山市街地	更埴市	6,869	3,403	1,940
屋代市街地	更埴市	6,316	3,406	2,429
坂城市街地	坂城町	5,511	4,956	3,257
戸倉市街地	戸倉町	6,254	3,116	1,786

1995年 は国勢調査の人口集中地区の人口，1920年 は国勢調査，1870年代は「長野県町村誌（1922）」による当時の行政区画の人口

るため、松代から高社山を望むことができない。つまり、松代周辺において、はじめて北信五岳のみを望むことが可能になるから、この文化景観の発信地は地域的に松代周辺に集約されると考えることもできるのではなかろうか。

ところで、全国の主要都市はその起源を城下町に持つものが多い⁴⁾。その点において長野は、善光寺の門前町に起源を持つという特異な都市として知られている。しかしながら、それはあくまでも1966年の広域合併以前の長野市、現在の長野市街地に関してのことである⁵⁾。ここで、行政上の市町村ではなく各市街地（国勢調査における人口集中地区）を実質的な一つの都市とみなして、北信地方の都市についての検討を加えてみよう。

現在の北信地域における主要都市の人口をみると、長野（177,443人）、篠ノ井（24,020人）、須坂（22,091人）、中野（12,949人）、松代（9,744人）の順となる。ここに示されるように、長野は北信で最大の人口を有するプライメータ的な都市であるから、われわれは、北信地方に伝わる文化はすべてが長野を中心に形成されてきたものと考えてしまいがちとなる。

しかしながら、1920年当時においては、長野（37,308人）、須坂（17,554人）、松代（8,178人）、中野（7,856人）、飯山（7,273人）の順となり、長野と他の都市との人口格差は現在ほど大きいものではなかった。また、明治初期における北信第1の都市は松代であり、明治初期に中野県庁が設けられた中野の3倍の人口を有していた（第2表）。さらに藩政期に遡ると、城下町松代は門前町長野に勝るとも劣らない都市として位置し

ていたのである⁶⁾。松代は十万石の城下町としてだけではなく、当時の北信地方の文化の中心地でもあったから、現在に伝わる文化のいくつかがここで誕生した、としても不思議ではないのである。なお、北信地方における儀礼の場で客を迎えるための儀式として知られる「北信流」も、もとは松代藩における儀式が元になっているとされるから「松代流」でもよさそうだが、近代に入ってから、松代に比べて長野の発展が著しく、長野が地方の大都市になるにつれて松代の地域的な重要性が低下し、名称が変化してきたものと考えると納得がいく。

IV おわりに

地域々に伝わる文化は、その文化が育まれた地域環境を反映している。したがって、文化が生まれたルーツを探ることにより、その文化の発信地、文化が生まれた当時の都市体系を復元することが可能になるのではなかろうか。ここでは、「北信五岳」という文化景観のルーツを探ることにより、当時の都市体系の復元を試みようとした。

何気なく用いている「北信五岳」だが、その中には意外にも県外の妙高山が含まれている。これは、北信五岳を望める場所、すなわち文化景観の発信地が関係しているのではないかとの仮説をおき、地図及び実地における観察によって、北信五岳を一望できる場所の特定を試みた。その結果、藩政期における中心都市松代や、明治初期における中心都市中野という、近世における都市体系の一端に近接することができた。

以上、本論において文化地理的手法による都市体系の復元を行ってみたが、この手法の有効性については、他の地域におけるさらなる検討を試みる必要があるだろう。

注

- 1) 北信五岳の由来に関する既刊の資料はほとんどみあたらない。ただ、飯縄山、戸隠山、黒姫山、妙高山の4つの山々に関しては、明治初期に刊行された『信州奇勝録』に、信濃町古間からの「四山一望」という形で紹介されている。
- 2) 現中野市を含む旧下高井郡および、現須坂市を含む旧上高井郡。
- 3) 大正初期においても、鳥打峠がメインルートとなっていた。
- 4) たとえば藤岡編（1983）など。
- 5) 長野市の成り立ちについては、石澤（1992, 1998）などを参照されたい。
- 6) 同じく5）を参照。

文献

- 石澤 孝（1992）：都市の成立起源と成長過程—門前町長野と城下町松代の場合—。
信州大学教育学部紀要，77，83～109。
- 石澤 孝（1998）：『都市の成立と発展』 龍鳳書房。
- 井出 通（1887）：『信州奇勝録』。信濃資料刊行会（1976）：『新編信濃資料』所収。
- 藤岡謙二郎編（1983）：『城下町とその変貌』 柳原書店。

（2000年5月23日 受理）